

徳川宗春「咄書」

高家寺北川宥智 現代語意識

「『およそ人というものは老いても若くても、気の締まりと緩みがなくては、何事にも勤まり難いものである。その中でも好色は心の奥底からでるものであるので、ある意味飲食と同じことといえる。それゆえに、そうした場所がなければ男女の心が締まりなくなり、ふだんに召し抱えている女性をもかえって遊女のように扱ひ、自然と不義も多くなつて家の中もとのわず、国の風俗まで悪くなつていきがちである。このたび、あちこちに見物所や遊興所を免許したのは、諸人のところどころの気鬱を散じて、相応の楽しみもでき、心も元氣になり、悪く硬く窮屈になつた心も解きほぐされ、このように気持ちがいかつくなることもなくなり、子どもたちが諍うようなことも止んで、田舎風の士氣も離れ、武芸はもちろんのこと、その他の家業家職を怠ることなく、すべてのことに融通するためのものである。しかし、意味合いを理解せず締まりのない者は遊び事ばかり思い込んで、日夜にわたり遊びばかりになり、金銀を浪費し、後先のこととも考えずに心が落ち着かず、我が家の内のことも忘れて、使わなくてもよい大金を使つてばかりで、支払うこともできなくなり、先方には損をさせ、自分自身にも迷惑千万なことになり、そのうえ、理由もない勘定書などを付けられて、さまざまところで悪口を言われるようになって返事もできず、世間の評判を失つてしまう連中もいるようなことを聞いている。これは考えもなく横柄にし、自分より他にこのようなことができるものはいまいと、世間に幅をきかせたあとにはいづくらいになつたとしても、つまるところは、人のものを借りておきながら、返さぬのと同じことであれば、身分が軽い者たちにいわれても口を開けることができず、最初の幅ほど大きければ大きいほど世間は狭くなり、肩身を縮ませ、大切な方向もまったく覚え、知らず知らずに不忠の者となつていくものだ。たとえ毎日遊びにやつてきたとしても、よく考ふる者は、その身体は、生計を立てていくその余暇であつて、遊びに消費したと言つても少しも害になることはない。ほどよく美味しいものを側に置いておき、ゆつくりと食べれば、飽きることもなく食あたりもしない。ものを好みに任せて一度に食べ過ぎてしまい、腹を下して病になるのと同じことである。つまるところ、自分のものを使い捨てるのは、それぞれの覚悟の上のことなので、そこからやかく言われることでは

ないのだが、どんな用にも役立たず、愚か者とか不行跡などと名指されて、一生涯邪魔者になるのは残念なことだ。そのうえ、このたび許した場所は永続的にあるものなのに、一年か半年きりで終わってしまうかのように思い込み、道を急ぐかのようになっているように見える。江戸京大坂などでは昔からのことであって、常にあるものである。人の心がおのずと締まり緩みがある者ほど良き身のおこないである。しかし生まれもつての愚か者はいずれにしても同じである。そのような生まれつきの愚か者でないのに、愚か者になってしまうことはとても残念だ。当尾張藩には今まではこのような遊び場がなかったために、物珍しく、心違いをしているものと思う。ただただいつまでも安心して、その身その身を分際を考え、身体の障りにならないよう、食べ物の養生のようにならなければ、風采や威儀もよいものとなり、心の味わいもでき、長生きするための第一かと思う。このように心得れば、免許した見物所や遊興所が、いつまでも相変わらず衰微しているのではなく、末に至るまで根強く繁盛していれば、暮らしぶりも快くなっていくはずだ。』

この儀をふとお思いになられたので、殿(宗春)はお話された次第です。皆の者、またそれぞれの家臣に至るまで、このこと深く心に刻んでおくように。身分が高い者ほど、このことを心して、皆の手本となるように。違背したものは、厳罰に処しまする。」